

あとがき

今回の山田正亮展はWorks on Paper 1950～87とあるように、鉛筆、パステル、コンテ、クレヨン、水彩、油彩等で描かれた紙の作品をリトロスペクティヴに展示し、ご覧いただく展覧会である。

この展覧会のカタログのテキストは早見堯さんにお願いした。早見さんは早くから山田正亮の仕事に注目し、丁寧にその仕事をみてこられた美術評論家であるが、この展覧会のために力稿をお寄せいただき感謝している。

この展覧会は山田正亮という一人の作家の出発から現在までのすべての仕事を通観できるのが大きなポイントである。いずれ折をみて油彩(キャンバス)によるリトロスペクティヴな展覧会が行われることが期待されるが、その前に山田正亮の仕事の源泉を示すドローイングによってこの作家の全貌をみていただこう、というのが今回の展覧会の意図である。

山田正亮が立体派的な静物画から画家として出発し、その解体から現在に至る37年間、その形式に変化はあるが、実に頑固なまでに純粹に「絵画」を追究してきたことがこの展覧会で示されている。山田正亮には大げさな身振りがない、色彩にはケバケバしさがない、そしてドローイングがうまい。山田正亮は自分自身に向って仕事を進めてきている。彼の仕事が知的でスタティックなのが特徴であるが、最近ではそれに動きが加わり艶が出てきた。彼の仕事の筋道を辿ると、そこに常に強い思考性を見るのであるが、最近作では身体の動きが画面のなかに入り込んでいて、自在さを感じるようになってきた。スケールが一段と大きくなったのを感じる。これはうれしいことである。

山田正亮はパウル・クレーに似ている。似ていると言ってもそれは勿論作風ではない。クレーと山田ではその考え方、成り立ち、時代が異なるから当然である。似ているのは二人とも自分の作品に番号をつけ、丁寧に整理しているところである。これはなかなか出来ることではない。自分の作品に対する自信と責任と愛着がなければ不可能である。このことは特記されてよい。

ところで、私はサンパウロ、ペルーへの2週間ばかりの旅行を終え、一昨日帰国したばかりである。山田正亮さんが第19回サンパウロ・ビエンナーレ(10/2～12/13)に選ばれ、山田さん自身サンパウロに行かれるので、この機会にと、一緒に出掛けた次第である。

今回の日本からの参加作家は山田正亮、彦坂尚嘉、海老塚耕一、川俣正の四氏で、東野芳明さんがコミッショナーである。ブラジル特有の悠々たるペースで設営準備が進むので、オープンに間に合うのかと心配したが、無事完了しホッとしたものである。9月28日の国際交流基金主催のレセプションには300名の招待者が予定されていたが、実際には500名に及ぶ大盛況で、わが国に対する期待の大きさを感じさせられたものである。

それにしても世界の大債務国で金利も支払えないブラジル政府が国際的な美術展を開催し、一方、世界の大債権国でかねの運用に困っているわが国で国際的な文化事業が行われないというのは、何たるアンバランスであろう。価値観の相違とだけでは済まされない問題である。これではわが国は嫌われるナ、というのが私のひとつの感想である。

最後に、サンパウロ・ビエンナーレ出品作による山田正亮展を来年6月、当画廊で開催の予定である。ご期待いただきたい。

1987年10月11日
佐谷画廊 佐谷和彦